

令和3年2月

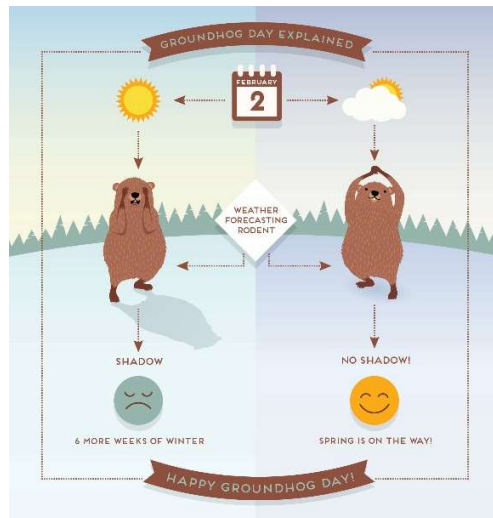
2月に入り、ひと月間出されていた緊急事態宣言は2月9日で解除となりました。トロント、ピール、ヨーク、ノースベイ・パリーサウンド地区を除いて制限措置の緩和が段階的に始まっています。最近の要素として、変異種の問題があります。制限の緩和は喜ばしいことですが、感染予防は続けなければなりません。皆様、お住まいの地区の情報に従い、新型コロナウイルス対策を引き続きよろしくをお願いします。

2月に入りますと、だんだんと日も長くなってきます。

日本でも、冬至と春分の間であるこの時期に節分や恵方巻きといった、春を待望する行事があります。オンタリオ州の冬は長く厳しいので春を待ちわびる気持ちはよくわかります。コロナ禍の中にある今年は、その気持ちは一層強くなる気がします。ここカナダでは、春の到来はいつか、冬はいつまで続くのかを、冬眠中のグラウンドホッグに起き出してもらい、占ってもらおうというほほえましい行事があります。今月は2月2日に毎年恒例の行事となっている、「グラウンドホッグの日」についてご紹介したいと思います。



2月2日払暁、毎年グラウンドホッグに冬眠を中断(?)して穴から出てきてもらい、その朝に太陽が出ていてグラウンドホッグが自分の影を見て、驚いて穴に戻れば、冬はさらに6週間続く、曇っていて陰がなければ、春の到来は早い、と見るのだそうです。起源は諸説あるようですが、欧州から北米に移り住んできた方々が定着させた行事のようです。



カナダ、オンタリオでも各地で催しがあるようですが、私の関心を引いたのは、オンタリオ北部の街、ウィアートンという町の、ウィリーという名前を持つグラウンドホッグの話です。起源は、1956年、街をグラウンドホッグの街として売り出すために、ある人が新聞記者に招待を出した。記者はウィアートンを訪問したのですが、実際にはグラウンドホッグのウィリーはいません。記者は、記事を書くことなしにトロントに戻ることはできず、困ってしまいました。そこで一計を案じ、穴を掘ってご婦人の白い帽子を投げ入れて、グラウンドホッグの代わりにしたそうです。

このような行事を通じて、昔からオンタリオのひとは、長い冬を耐えて、春を待ちわびてきたのだな、と伝統行事の意味がよく理解できた気持ちがしました。今年は、オンラインでのグラウンドホッグの日が各地で開催されたようです。例年多くの訪問客で賑わうというウィアートンでも今年はオンラインとなり、65年前の故事に戻って、白い帽子を投げて春の到来を占っていました。

この時期はまた、旧正月にも当たります。先日、近くのベーカリーに行きましたら、旧正月の丑年バージョンの特製ケーキを売っていました。多様な文化を誇る、トロントならではの演出と思いましたので、ここに写真を紹介します。



グラウンドホッグの日を紹介しましたが、まだ本物を見たことがありません。現在、私は「オンタリオの動物たち」というツイートを毎週金曜日正午に出しています。もし機会があれば、冬眠から覚めたグラウンドホッグの勇姿を撮影したいと思っています。



在トロント日本国総領事 佐々山 拓也